

年をとつたせいか、私も人並みにカミやホトケのことが気になり出した。私たちの世代は、敗戦直後に青春を送ったせいで、国家神道は廃止され、佛教は近代以前の“封建遺制”的イメージと結びつき、宗教といえば、キリスト教の人格神が問題であった。西欧文明、近代精神、デモクラシーはキリスト教と不可分であった。

敗戦後の数年間だが、マルクス主義の流行以前、学生たちは聖書やイエスの伝記を熱心に読んだ。それ以後、私の関心は哲学、史学、文学、そして政治学から社会思想と関心が移り、日本の社会も、経済修業と経済成長で、何がしか自信を回復し、比較文明論的に宗教を考える姿勢が一般化してきた。

神道に関しても、神官の家に生れたという柳田國男や折口信夫の民俗学が大学というアカデミズムを超えて、広範囲の読者「愛好者」研究者を生んだ。最近では宗教学の山折哲雄氏が、神道と佛教の共存、神佛混淆が日本社会に、平安朝や鎌倉時代のない平和をもたらしたのではないかといった仮説を出されたり、近世史家の尾藤正英氏が、「明治神宮は、東京人にとっての鎮守の森ではないか」という面白い見方を披露している。

私自身も日本社会に生息する一員として折り合いをつけなければならない。キリスト教的人格神とカミやホトケの間で、これは難題だが、死ぬまでこの問いはつづくことだろう。そんな気分のなかで、『神、人を喰う』という表題は、氣鋭の新人の新刊書に出会った。

阪大の中村生雄氏や東北芸術工科大学の赤坂憲雄氏の指導と影響下にある学徒のようであるが、『人身御供の民俗学』という主題は大膽な主題であり、「神、人を喰う」という表題は



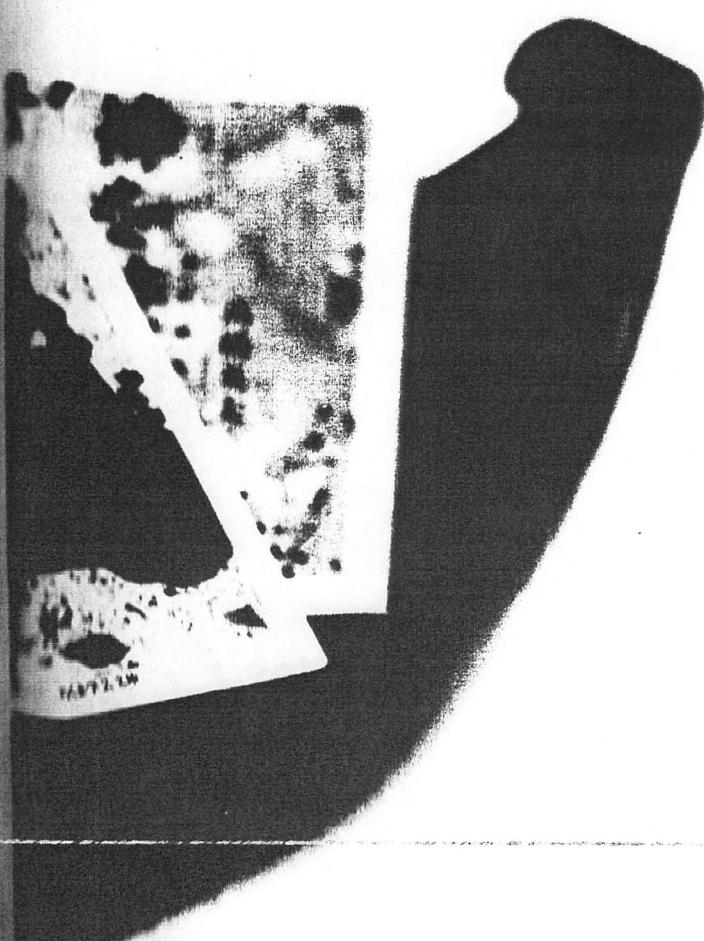
『神、人を喰う——人身御供の民俗学』六車由実著・新曜社
『神を見る——神話論集1』『神を読む——神話論集2』高橋英夫著・ちくま学芸文庫

神との関係を回復する道を求めて

柏谷一希

都市出版株式会社 相談役

かすや かずき／一九三〇年東京都生まれ。
東京大学法学部卒業後、五五年中央公論社(現・中央公論新社)入社。
「中央公論」編集長など、雑誌編集に一貫して携わり、七八年退社。
文筆活動を経て、八七年に都市出版株式会社設立。
主な著書に「中央公論社と私」(文藝春秋)
「メディアの迷走」(P.H.P研究所)、「対談書評 歴史の読み方」(筑摩書房)などがある。



六車という変った名の著者は、一九七〇年生れという若さ。気負いからくる構えのしさか大仰さがあるものの、よく、広範な民間伝承を実証的に押え、またこれまでの民俗学者の学説史を明確に検討した上で、神社信仰のなかで広範に見られる人身御供の伝承を、その起源から変容過程まで明晰に分析している。六車さんの結論は、これまでの「毒ぬき」されたさまざまな見解を批判し、

（祭りにおける「犯す神」や「喰らう神」は、根源的な暴力への期待を語つており、）人身御供譚は、喰われることで神と一体化する原初的な神と人との関係を語ることで、祭のなかに、神と一体化する身体感覚を呼び起こしているのである。（三三〇頁）

自己の実感と研究の上に師の説をも批判する六車さんの発想には、「毒ぬき」された近代主義をも超える生き生きとしたエネルギーがある。民俗学の現説の一端を垣間見た想いだが、私自身のカミやホトケへの問題意識が解けたわけではない。

もう一年になるが、友人の文芸評論家、高橋英夫君が、かつての文章をちくま学芸文庫に収めた。三十年前、「見つ畏れよ」（『新潮』一九七一年九月号、のち『見つ畏れよ』（新潮社・一九七三年刊）、「引用と再現」（『文芸』一九七四年一月号、のち『役割としての神』（新潮社・一九七五年刊）を発表して、文芸評論家として独自の地位を築いたのだが、おそらくいまの六車さんと同じくらいの若さだったろう。高橋君の場合も折口信夫の影響を

受けているが、早く小林秀雄の虜となつた彼の場合は、ドイツ文学から文芸評論の道を歩んだ。文芸評論で正面から神を問題にすることはめずらしい。ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』、ケレーニイの『神話と古代宗教』を翻訳したことが、高橋君の文芸批評の出発点をなしている。ホイジンガの遊びへの洞察、ケレーニイのテオリア（観照）とリギオ（慎み）の解釈が、彼に独特の世界を築かせた。

志賀直哉とケレーニイ、志賀直哉のリアリズムの眼とケレーニイの神の眼、この対極にある眼が人間性との関連で通底するものがあるのではないか、これが『神を見る』の主題であり、原初や始原への関心を中心によとめたのが『神を読む』の主題である、と作者自身が解説している。

高橋英夫君の場合、神という名稱は人間の原初の意識に対して与えられる、もちろんの名稱、形容の中の一つにすぎないという。彼はそこから先、神に没入はしない、と言い切る。

六車さんの民俗学は、神との一体感を回復することで、失われた生の実感を回復することを目指す。そこには荒々しい野生の魅力がある。高橋君の文芸批判は、あくまで醒めた知性、都会人の静かな、しかし自信に満ちた言葉である。

おそらく、私の求めている道は、日本人の具体的な生活に根差しながら、普遍的的理念をもつた神との対話であろう。しかし、私にはその道は見えていない。五里霧中の道を当分さまよわねばならない。

